

●竜も見ほれた景勝地

小林を流れる河川は、九州山地の白髪岳に端を発する浜の瀬川と、霧島山系を源とする辻之堂川と石氷川の三本である。いずれも岩瀬川に合流し、岩瀬川は大淀川となって太平洋へと注ぐ。その浜の瀬川が平地に下ってきたところに、野口雨情の歌碑「浜の瀬川には二つの奇岩 人にかいふなよ語るなよ」が立っている。

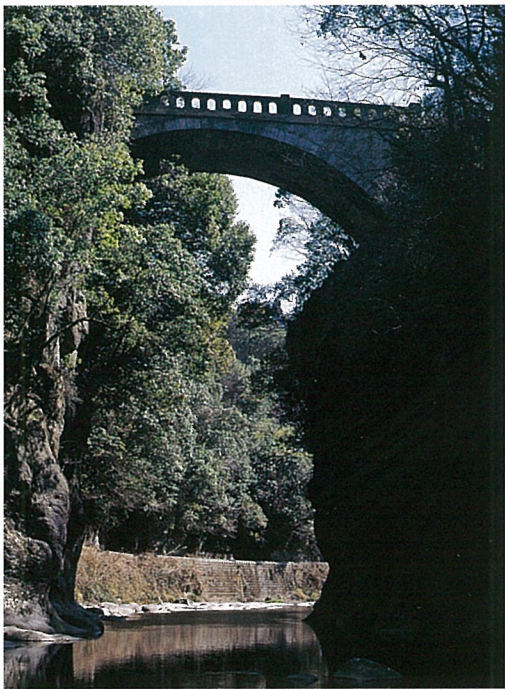
一九二九（昭和四）年四月、雨情は旧制小林中と同高等女学校の講演に招かれる。陰陽石を見た雨情は自然の造形に感動し、この歌を詠んだという。陰陽石は太古の溶岩や火山灰が固まり、川や風によって浸食されたもので、陽石は一七・五メートル、陰石は五・五メートル。周りの風景になじみながら、広く親しまれている。

ここから川を数キロ上ると、三の宮峽である。一帯は「昇天の竜が見ほれた」という伝説が残るほどの景勝の地である。七八（昭和五十三）

年には県の緑地環境保全地域に指定されている。車を降り、川に沿って遊歩道を進むと、手摺りのトンネルを十一くぐる。小林宮林署が木材を運搬するために使っていたトロッコの跡である。小林市はこれを払い受けて、自然や風景を楽しめる行楽地に改修した。

途中には河童（かっぱ）洞、屏風（びょうぶ）岩、千畳岩、針の耳などの名所がある。なかでも櫓（やぐら）の轟（とどろ）が有名。九六（平成八）年、環境庁はことと、えびの高原の「野生ジカの声」を「残したい日本の音風景百選」に指定した。ハイカーはここでしばらく休み、音に聞き入ることになる。

終点が橋満橋。高さが二十二メートルで、アーチ式のコンクリート橋である。ごく普通の橋だから見落としがちだが、ここにはあるエピソードが秘められている。



橋満橋。市文化財で、三の宮峽のシンボル

造られたのが戦時中の四三（昭和十八）年。物資不足だったから、鉄材がなかった。困った人々は鉄筋の代わりに竹材を思いつき、コンクリートの中に埋め込んだ。それ以来、別名を「竹の橋」と呼ぶようになった。八二（同五十七）年、三の宮大橋が完成するまでは浜の瀬川の両岸を結ぶ生活道路であった。市は九〇（平成二）年、市文化財に指定し、長く保存することにした。

ところで小林市には「おもしろ発見塾」がある。自分たちの町を再発見しようとする市民グループで、頼めば案内してくれる。名所旧跡も、地域住民の理解がなければ生かされないということだろう。